九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「中国域外漢籍国際学術会議」のこと

町田, 三郎
九州大学

https://doi.org/10.15017/18110

出版情報：中国哲学論集. 14, pp.57-61, 1988-10-30. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

学会消息

「中国域外漢籍国際学術会議」のこと

町田三郎

一九八六年の九月末、神田の明治大学で「中国域外漢籍国際学術会議」なる学会が誕生し、その第一回大会が三日間にわたって同大学の講堂で挙行された。その翌年は台北の新聞社「聯合報」の会議室がその舞台となった。いずれもなかなかの盛会であった。今年は迎えて第三回である。九月十三日から十六日まで、まさにオリンピック開催直前のソウルで、建国大学を開催校として行われた。十三日は漢江北岸に広大なキャンパスをもつ建国大学本館での登録、総長表敬、そして夜は総長主催の歓迎レセプション。十四日から十六日は、いまやオリンピックで人も車も満杯のソウルを離れて、忠州郊外の保養地水安堡（すあんぼ）のパークホテルに場所を移しての研究会であった。

元来、この学会は中国大陸以外の諸地域に散在する漢籍を研究紹介しつつ人と情報の交流を密にすることを目的としていた。主に台湾・韓国・ベトナムそして日本の刊本や鈔本、叢書の類が紹介・報告される。例年の参加者も上記の諸国及びアメリカ・フランスからの参加もあって、およそ七、八十名。うち発表が三十から四十。二から三の分室で、一人三十分の持ち時間。午前九時から始まって、中間に昼食会をもつとはいうものの午後六時過ぎまで続けられる。適当にコーヒーブレイクは作るものの、しっかりつき合うとかなりくたびれる。こくのある学会である。

開催校である建国大学のわれわれに対する接待は、いかにも熱心であった。理事長の劉承潤氏、総長の金容漢氏は、連日会場に姿を見せ、だれかれとなくにこやかに話しかけられる。好印象のボスたちであった。

会場の水安堡は、ソウルから高速道路をバスでとばして三時間。四方を山に囲まれた小盆地の温泉地である。この地も五年ほど前までは平屋のひなびた旅館が何軒かあった程度であったが、いまでは鉄筋高層のホテルが立ち並んで

いる。ここ数年で韓国は田舎まで急速に変りましたよ、とこの国の老学者が教えてくれた。その通りであろう。

会場は二つに分かれ、発表者は三十六名。日本からの参加者と発表題目は、左の通り（発表順）。

1　関於浅見絅斎的『靖献遺言』　笠　征（福岡大学）

2　中国漂着船尋問記録にみえる儒者たちの意識について　菰口　治（福岡教育大学）

3　日本残存古韓本『大顚和尚註心経』について　福井文雅（早稲田大学）

4　五行大義の鈔本・刊行について　中村璋八（駒沢大学）

5　談従朝鮮伝来的琉球収蔵佛経　糸數兼治（沖縄県立図書館）

6　『孟子集注』とその栗谷諺解　成沢勝（拓植大学）

7　叢書『漢文大系』の刊行について　町田三郎（九州大学）

8　将軍吉宗の実学的漢籍の輸入と『名家叢書』　川勝守（九州大学）

9　再論明之閩本及其環境　芦田孝昭（早稲田大学）

なお成沢勝氏は、この会議に参加するための諸準備をすべて整え、事務局からの正式の招請状をまっていたが、来

信が遅れたため大学からの渡航許可が得られず、ついに参加を断念せざるを得なかった。この事務的な遅滞は、本人及びこの学会のために誠に残念なことであった。たまたま私が氏の発表の司会を担当していたので、冒頭でこの事情を日本語と中国語とで報告し、参会者の了解をえた。

九月十六日、会議は無事終った。

左に掲げるものは、私の発表要旨を研究室の連清吉君が訳出したものである。当日会場にて配布し、おおよそこれに従って発表を行った。

関於叢書「漢文大系」的刊行

自明治四十二（一九〇九）年、至大正五（一九一六）年、近八年間、日本陸續刊行「漢文大系」叢書。其刊行的目的、主要是為了有系統的介紹中國古典之基本典籍、選擇具有代表性的古籍及其精審的注疏。另外、也收録幕末以迄明治年間、日本學者研究中國古典的精注、一併編輯而成。

「漢文大系」之名、是由芳賀矢一所取的。審訂則由當時研究中國學的代表人物、服部宇之吉、重野安繹、星野恒、井上哲次郎、小柳司氣太、安井小太郎、岡田正之、島田重禮、兒島獻吉郎等負責、而服部宇之吉為聰編輯。

此叢書最初預定編輯十二巻、在三年内完成、由富山房出版。第一巻「四書」於明治四十二年十二月、以堅牢的菊版刊行。其後增入重要古籍、在大正五年十月、以「楚辭、近思錄」巻的出版、編輯完竟。共收錄二十二巻、三十八種書。

按四部分類部次

經部

易經、書經、詩經、春秋左氏傳、禮記、四書、弟子職、小學

史部

戦國策、史記列傳、十八史略

子部

老子、莊子、列子、墨子、韓非子、管子、荀子、淮南子、七書、孔子家語、近思錄、傳習錄

集部

楚辭、唐詩選、三體詩、古文真寶、文章軌範、古詩掌析。

顯而易見的、經部和子部的書頗為賅足、而相對的、史部和集部則有疏略之感。蓋經部搜羅了四書、五經、著名之子書或僅呂氏春秋、春秋繁露未收録。至於史部和集部則有可議者、為何重要者如漢書、文選、古文辭類纂等都未入、則或許和當時的社會風尚和教育狀況有很大的関連。

幕末以迄明治年間、日本學者於中國古籍之精詳的訓詁、如安井息軒的四書注。其「論語集説」是析衷於新、舊注説、而疏解精審。受到極高的評價、一時流傳。「大學説」「中庸説」、「孟子説」是安井家保存的未刊稿、由於此次編修「漢文大系」、才得以刊行問世。同樣的、太田方的「韓非子翼毳」、是翻印自德川家文庫本而刊行。此書是太田家自刊二十部中、碩果僅存的一部、藏於德川幕府。至於竹添進一郎「左氏會箋」、是以金澤文庫舊藏杜預注古寫本為底本、博採清代諸家注疏而成、甚為精詳。另外、諸葛晃的「列子考」、岡松甕谷的「楚辭考」皆一時之作、都收録在「漢文大系」中。綜觀此叢編、或注疏精審的善本、或精注本而未刊者、或庶幾亡佚的罕見本。由於此次的網羅、上述諸書才得以流傳。再者、是編之刊行、将近世日本學者於漢学研究的成果呈現於世。而活字排版、刊行善本、以廣流傳。於拓展日本漢學研究之層面上、居功厥偉。

由於「漢文大系」的選輯者、皆日本漢學研究的代表作、如安井息軒的「管子纂詁」、允為當時管子注釋的首屈一指之作。而「韓非子翼毳」、「左氏會箋」等亦為出色的注本。如是、斯編或有意将日本學者的學問及研究成果、公諸於世。此叢編又有便利後學研究的用心。如詩經、書經、兼採漢唐經傳注疏與北宋訓解、使訓詁與義理之異趣、得以一目了然。再者、擷取中國最新之研究成果、如孫詒讓的「墨子閒詁」、王先謙的「荀子集解」。可見日本對中國本土出版的重視、毫無時空之隔絶與疏離的現象。在這點上、對「漢文大系」自然不能不有所評價。

「漢文大系」於明治四十年代刊行、時値日本近代國家之確立期。斯編或對幕末以来之學問傳統的再評價、或綜合介

紹中國近代學術成就與古代新、舊注疏之精義。亦即折衷中國漢、宋注疏、兼採清代訓話、擷取日本漢學家之精注、而融貫於其中。頗見博采通說之功。